

令和6年度第1回横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会	
日 時	令和6年10月11日（金） 14時00分～16時15分
開催場所	市庁舎18階 みなと1・2・3会議室
出席者	穴澤委員、内田委員、岐部委員、久保委員、久保田委員、小林委員、小宮山委員、坂本委員、篠崎委員、武隈委員、鶴見委員、豊田委員、名倉委員、西尾委員、福本委員、星委員、森委員、山野上委員（18名）
欠席者	有本委員、水野委員、井汲委員（3名）
オブザーバー	横浜市社会福祉協議会、横浜生活あんしんセンター、健康福祉局地域支援課、健康福祉局企画課、市民局地域活動推進課
事務局	健康福祉局福祉保健課、健康福祉局生活支援課
開催形態	公開（傍聴者なし）
議題	<p>【議事1】委員長の選出について</p> <p>【議事2】職務代理者の選出について</p> <p>【議事3】横浜市地域福祉保健計画について</p> <p>ア 第5期横浜市地域福祉保健計画について</p> <p>イ 第5期横浜市地域福祉保健計画の推進について</p> <p>【議事4】区計画策定に向けて</p> <ul style="list-style-type: none"> 意見交換
決定事項	<p>【議事1】委員長に西尾委員が選出された。</p> <p>【議事2】職務代理者に豊田委員が指名された。</p>
議 事	<p>開会</p> <p>議事</p> <p>【議事1】委員長の選出について</p> <ul style="list-style-type: none"> 委員会運営要綱第6条に基づき、委員の互選により西尾委員が委員長に選任された。 <p>【議事2】職務代理者の選出について</p> <ul style="list-style-type: none"> 委員会運営要綱第6条に基づき、西尾委員長の指名により、豊田委員が委員長職務代理に指名された。 <p>【議事3】横浜市地域福祉保健計画について</p> <p>ア 第5期横浜市地域福祉保健計画について</p> <p>イ 第5期横浜市地域福祉保健計画の促進について</p> <p>【議事4】区計画策定に向けて</p> <p>（事務局）資料3、4、5について説明</p> <p>（西尾委員長）何か質問がありましたら発言をお願いしたい。新任委員の方も遠慮なく聞いていただきたい。市計画は第5期計画がスタートしているタイミングであり、区計画は今年度、来年度、第5期計画に向けて策定が進んでいく状況である。</p> <p>（福本委員）初めて私がこの委員に参加したときも、第4期の初回の説明であった。その際は、プロモーション動画のちふくちゃんがかわいいなと思ったが横浜市地域福祉保健計画の何なのかがよく分からなかった。その後区計画でも動画が展開されたが、どう紐づいているのかが一般の人に分かるのかなと思った。横浜市の計画があって区の計画があり、さらに地区の計画があると思わないと、身近なものに感じ</p>

られないのではないか。

(西尾委員長) 事務局から、プロモーション動画についていかがか。

(事務局) 本計画の冊子は分厚く中身も複雑であるため、一般の市民が認知している状況ではないと思う。そのため、今回の動画では、市民の皆様、個人個人にも関連する計画があることをメッセージとし伝えていきたい。また今回つくっている動画は、地福計画の内容を事細かに説明するものではなく、これを導入として、既にある資料などにつながるきっかけになればと考え作成している。

(福本委員) 映画館などで放送されるということで、多くの人の頭の片隅に入れてもらうならばインパクトが弱いかと思った。せめて皆様の住んでいるまちの計画もあるから調べてみてねという「つながり」を持たせないと、全部単発的な事業なのかというイメージを持ちやすいかと思った。

(西尾委員長) 地域福祉がどこか遠いところで行われているということではなくて、私たちに関係しているし、自分の生活につながっていることが分かる工夫をお願いしたいということによろしいか。また、横浜の計画は、市計画があり、区計画があり、さらに地区別計画が全ての地域でつくられているということが非常に大きな特徴ではあるので、そのあたりが伝わるような取組をお願いできたらと思う。

(森委員) 健康福祉局においては、動画を市営地下鉄などで数年前から配信しているのを拝見している。啓発という部分で、今年度から障害者差別解消法が始まっているという点は、障害福祉に関わる者としては重視しなければいけないが、実際に地域共生という部分では障害に限らず様々な方々が暮らしていて、障害福祉に関わらない方々に知ってもらうためには、映画館や市役所に限らず、もっと広く伝えていただくことをお願いしたい。媒体においてはこの10年、20年で新聞等の文章からデジタルに変わっているので、規模の大きい政令指定都市である横浜市として様々な媒体を使って発信していただきたい。地域福祉保健計画という名前は難しく、参加する私たちも全てを知るのは難しいが、こういったことが行われていることを、せめて中学とか高校レベルから知ってもらうというのが一つの策としてあるのかなと。これを例えば試験的に1区で進めていくというのがいいのかなと感じた。

区計画策定・推進支援については、複数区の地福計画を確認したり、また、区計画策定や地区別計画にも関わってきた。今年の1月には金沢区において障害者グループホームの反対もあり、市の地福計画が区計画、地区別計画にどこまで反映しているのかという部分が正直見えない。さらに地区別計画を確認すると、私が今勤めている区では障害の事が出てこない。ぜひとも担当者研修または担当者会議等において、重点的にどこに取り組むべきかに力を入れてお伝えいただきたい。これから区計画作成に向けて、様々な当事者等の意見も含めて反映していただきたい。

評価指標を読むと定量的なものがかなり多く感じる。具体的にどのような形で定性評価を行っているのかをお聞かせいただきたいと思う。

(西尾委員長) これは事務局のほうでよろしいか。

(事務局) 中学校等でも本計画について周知すべきというご意見について、学校との協働はこれからも取り組んでいかなければいけないことだと思う。一部の区では、区役所が出前授業などで区内の学校と連携して、授業を行っているところもあり、ま

た、区社協でも福祉教育という形で活動をされているということがある。

2つ目の、区計画に市計画の理念が伝わりづらいことについては、市も市計画と区計画の連携について、密に行うために取り組んでいる。区への研修などを行っていたり、18区の担当者が集まって会議などを行う機会がある。ご意見いただいたものはそういった場で、18区に考えを共有できればと思う。評価にあたり18区がどのように市計画、区計画、地区別計画を連動させているかについては、事務局の定期的な連絡会議、担当者会議や区役所、区社協、地域ケアプラザの職員への研修等を実施し考えを共有したい。市計画と区計画と地区別計画は、連動していることを、年度の早い段階で共有している。

評価については、地域福祉保健計画は、取り組む姿勢や目指していくところについても計画したものであり数値だけでは表しにくいいため、定性評価についても重要視している。参考として別紙4に評価シートのイメージを添付している。定量だけでなく定性評価についても関係機関や支援機関がどのように実施した取組かということ、評価のときには聞き取り、まとめて評価する予定としている。

(森委員) ぜひ市民の声の評価指標も取り入れていただきたい。

(西尾委員長) 大事な視点を指摘、提起いただいた。評価については非常に重要なため検討していきたいと思う。

(内田委員) 先ほどの動画は、できれば小学校、中学校、高校などの学校で上映したほうがいいのではないかと。動画は子どもたち、生徒たちも分かりやすいと思うので、横浜市内の学校全てで上映したほうがいいのではないかと。

福祉教育については、区の職員が小学校、中学校に行って福祉について教えるのではなくて、例えば障害がある人または外国の方、いろいろな多様性を持った方や当事者が学校に行って、福祉についてお話しするべきだと思う。

(西尾委員長) 計画推進の福祉教育、学校との連携というところでご意見を頂戴した。福祉教育のご説明を頂けたらと思うがいかがだろうか。

(事務局) 福祉教育については、社会福祉協議会で各学校のご希望に沿いながら、特に地域の障害当事者の方であったり、子育て中の方、あるいは高齢の方をお招きするような形で実施している。その中で、内田委員にも、お住まいの区を中心に幾つかの区で講師として学校に出向いていただいている。若い頃からそういった触れ合う機会を持つことで福祉の心が根づくことを意識して、当事者性を持って社会福祉協議会で進めているが、この場でも引き続きご意見を頂きながらよりよい形ができればと思っている。

(穴澤委員) 私は学校・地域コーディネーターで、学校の中で、障害者週間や人権週間で、校長先生に朝会等でお話しいただいたり、先生たちが総合福祉の授業をしてくださることに関わっている。ただ、学校によって温度差があったり、全ての小学校に満遍なく社協が来てくれるわけではないので、そういう差が出てしまうことが、すごく残念だなと思っている。プロモーション動画は、子どもたちが視覚的に分かりやすいものであると思うので、ぜひ子どもたち目線で必要なもの、大人向けだけではなく子ども向けのものもつくっていただけるとありがたい。先生たちも授業や朝会の中で人権週間や障害者週間があることを伝えられるし、子どもたちの意識づ

けになっていくと思う。ぜひ子どもたち向けの動画もつくっていただけたらありがたい。

(事務局) 動画については子どもたちにも分かりやすいようにという視点で取り組んでいるので、穴澤委員の言うところに合致するのではないかと思います。

障害に関しては、自分と違うと思いがちかなと思うが、地域福祉保健計画はいろいろな人が地域に住んでいるという入り口なので、助け合って、つながり合って生きていこうということをメッセージとして発していきたい。貴重なご意見を頂いたので、健康福祉局障害部と共有し、学校の話は教育とも共有させていただきたい。

(名倉委員) 指標について、定量・定性で評価して変化を確認するというのは非常にいい視点だと思う。その上でこの指標の設定の考え方だが、例えば私どもの老人クラブの活動でも、別紙2の34番や36番に書かれている食事会やサロン、お茶飲み会は、孤立防止の視点で大変重要な活動だということで積極的に取り組んでいる。老人クラブ全体の中でも800を超えるチームが居場所、たまり場づくりに取り組んでいるが、そういった活動が今後どのような形で評価されるのか、振り返りをしていただけるのか、先ほどの定量・定性の評価の中にどう反映されるのかというところをお伺いしたい。老人クラブの活動をしている皆様も、横浜市の施策の中に自分たちの活動がどのように位置づけられているのかということの一つのモチベーションにしている方も多いので、そういったときに説明できるといいのかなと思う。

(西尾委員長) 事務局、いかがか。

(事務局) 例えば、指標は別紙2にもあるとおり、1つの活動や1つの団体に特化した形ではなく、それぞれの地域の取組情報を集約している。実際に地域のいろいろな活動の統計を取っている中に、老人クラブの活動のなかで、例えば健康に関することなどの取組も入っているので、地域のそういった取組がこの数値の中に入ってくる。地域がそういった形で元気になり、おのずと横のつながりがあり、地域が活性化し、目指す姿になっていくというロジックで考えており、議論などをしてきた。

(西尾委員長) 第5期計画の評価方法のロジックモデルというのは、今期の計画の評価方法として登場してきて試みてみようというもの。活動指標、定量的な結果としての活動の広がりなどをどう評価して、それが地域福祉の目標にどう反映していくのかを少しずつ論理的にロジックで評価していくという、そういう試みへの挑戦でもあるということで、課題ではあるが、大事なご指摘を頂いた。推進評価の中で検討していければいいと思う。

(篠崎委員) 資料4に、この計画に対する区民の意見を募集するとある。集まった意見を計画に反映させるということで、今までの第4期でどの程度の数の意見が区民から集まったのか、内容としてはどのような意見があったのかというのを知りたいと思うが、いかがだろうか。つまり、どれだけ区民がこの計画に興味を持っているか、あるいは参加しているか、知りたいと思った。

(西尾委員長) 事務局、お願いしたい。

(事務局) 市計画でいうと、この計画の素案をお示しし、パブリックコメントで市民の皆様から意見を頂戴し、内容は昨年度の委員会でご報告させていただいた。区計画については、区民への調査などを区計画の策定期間に実施しているところもあり、

委員会などで共有している。ある区については、区民の声からこの計画につながっていたり、区計画が区民の1～2割程度しか認識されていないから、より進めていこうといった議論も聞かれた。数として細かいところを申し上げられないが、区のホームページでも公表されていたりする。

(西尾委員長) 本当に貴重なご意見・ご質問を頂いた。地域福祉保健計画は包括的な計画なので、それぞれの分野別の福祉のテーマにおける目標の推進を地域福祉保健計画の中でどう見ていくのかということで、特に障害部分でのご意見を頂戴したと思う。目標としては、地域共生というところが本当は共通しているはずだが、森委員のご指摘のように、地区計画で障害を取り上げて推進している地区は極めて少ない状態があるかもしれない。それが地域福祉保健計画の課題でもあるかと思う。これから区計画の策定も進んでいくと思うが、そういう課題をどう受け止めて、策定の中に盛り込んでいけるのかも検討していかなければいけないなと感じた。また、福祉業務の推進について、身近なテーマで問題提起をしていく必要性も非常に高いと感じた。また、福祉計画の推進、区計画の第5期計画に向けての策定への関わりが、それぞれの委員も地域の中であるかと思うので、ぜひよろしくお願ひしたいと思う。

意見交換

(西尾委員長) 第5期計画がスタートしたばかりでもあり、この推進をどのように進めていったらいいのか、自由なご意見を頂戴したい。

(事務局) 資料6について説明

(西尾委員長) 次世代という方向性で地域福祉保健計画がどう役割を果たしていくことができるのかについて、昨年の委員からもご意見が多数あり、また、法制度の点でも大きな展開を迎えているので、十分な意見交換ができればと思う。

(山野上委員) 今回、子どもに視点を当てており、子育てについては、いろいろなところで注目されているが、障害児の子育てがなかなか見えてこない。今日もガイドヘルパーの依頼を受けたが、障害のあるお子さんがいる家庭でお母さんが出かける間見てほしいというものであった。昔の地域であればご近所さん同士で見ているということがあった。私自身も子どもの頃、玄関から入ってきて冷蔵庫を開けて帰っていく子が毎日来ていて、今考えると自閉症だったんだなと思うのだが、そういう経験が障害者との関わりとつくっていくということでは、子育ての中に障害のある子どもがいて当たり前ということを、ぜひこの会議の中では注目していただきたい。そして、障害児の子育てをするお母さんたちの「待つ」とか、子どもの心を感じ取る、想像する、そういうところは、地域で人とつながる、高齢者とでもそうだし、お隣の人との中でもそうなので、そういったところでとても苦労されている方たちに出番をつくってあげる。そんな形での共に生きる形が出てくるといいなと思っている。

(西尾委員長) 障害のあるお子さんも子どもであって、子どもが地域で育っていく環境をつくっていかなければいけないが、障害のあるお子さんの場合はそれがまた難しいということもあると思う。支援の課題ということを言っていた。

(福本委員) 子育ての支援をしているということでお話しさせていただく。実際、子育て支援拠点は、何となく親子が楽しく集っている場というイメージを持たれていると思うが、私たちはお母さんやお父さんたちにも地域のことを知ってもらいたいと思っている。私たちは普通に地域という言葉を使うが、今まで町内会などを身近に感じていなかった子育て世代の方たちにとっては、そもそも地域って何？というところだと思う。子育て世代の方たちは、子どもを産むことでまちの中により近くなる。子どもは小学校に入ったらまちの人たちと生きていく人生を歩んでいくので、その前にお母さんやお父さんたちにも地域のことを知ってもらいたい。そういう願いを私たち職員は持って、来ているお父さんやお母さんに地域とのつながりを大事に考えてくださいねというのを、押し売りにならないように、地域のお祭りや防災活動や、そういうものをどの地域でどの時期にやっているのかというのを全部把握して、来ているお母さんたちの住んでいるまちで行われているものにつないだり、そういう仕事もしている。

先ほど障害のお子さんの話もあったが、地域子育て支援拠点、居場所と呼ばれるところは、基本的には疑似地域だと私は思っていて、縦・横・斜めの関係をつくって、そこで場慣れしてまちの中に出ていく、巣立っていく過程を踏める場所だと思って、場づくりをしている。子育て支援拠点にはシニアの方も、男性も女性もいらっしゃるが、ボランティアでお子さんの見守りをさせていただくことで、おじちゃんが苦手な子どももいて、男性のおじちゃんを初めて見たというお子さんもいるが、だんだん慣れてきて、最後にはもうファンになって、おじちゃんと離れるのが悲しいというぐらいの密着度で帰っていく。他にも、ずっとサポーターとして入ってこられていた方が認知症を患われて、この間お辞めになられたが、そういう方がいるんだよということを知ってもらいたくて、認知症を患っていても、ずっと活動を続けてもらっていた。障害もそうで、障害のある子どもであっても、ごちゃ混ぜの中で一緒に生活するというので、ほかのお母さんたちにそういう子どもがいるんだよということを知ってもらいたいし、逆に親に障害がある場合もあるし、精神疾患を持たれている方もいるし、いろいろな人がここに来ていい、子どもがさんざん泣き叫んでも大丈夫なんだよということで、安心してまちに出ていく、そういう場所だと思って活動している。これは多分、18区の拠点全てがそういう思いでやっていると思うので、ぜひ皆様にも知っていただいて、お子さんを見つけたら、近くの拠点に遊びに行ってみてと言っていただいて、そこでリハビリしてまた私たちがまちに帰していくみたいな、そういう循環ができていけば身近に感じられると思う。つながるといのは、つなぐ人が必ず必要だと思うので、そういうパイプに私たちになっていけばいいのではないかと思う。

(西尾委員長) 地域子育て支援拠点なので、まさに子育て支援拠点の中に地域が浸透し、そこからまた子育てがしやすい地域が広がっていくという感じは、やはりつながりがあるからということなのではないだろうか。いろいろ子ども、お子さんに関わっておられるところが非常に多いと思うので、穴澤委員に意見を伺いたい。

(穴澤委員) 今、障害のある子たちのためにたくさんお話をしてくださっていて、本当にありがたいと思う。今まで地域の小学校の個別支援級にいた子が、6年間地域で

育てられたというのは、子どもたちの理解という部分もあるし、私が学校・地域コーディネーターで関わっていたおじいちゃんおばあちゃんたちもとても理解してくれてありがたい。旗振りをしている見守り隊の人たちや地域の人たちが見守ってくれていたと思っている。その中で、障害児への理解はまだまだな部分があると思う。私もガイドボランティアや子育てサポートシステムに登録させていただいて、今年の夏休みは個別支援級の子のお母さんが仕事に行った後、放課後等デイサービスの人がお迎えに来るまでの見守りをさせていただいたりしている。障害のある子を育てたからこそできることを地域の子育ての中で発揮できるような、そういったネットワークができていくと、障害児を育ててきたというお母さんたちの自信につながるのではないかと思っている。我が子は障害児だったけれども、そのことを地域で役立てることができる場所が、お母さんたちには必要なのではないかというのを、私自身がすごく感じた。

(西尾委員長) 地域の自然なコーディネーターというか、そこで培った力を地域の環境の中に生かしていけるようにということかと思う。

(小林委員) 昨年、鶴見区の例だが、次世代の担い手を育てようということで、防災をテーマにして、大きな跡地のところに鶴見区の連合会が集まった。若者を集めて、防災の担い手を集めるフェアをやろうということで、中学生から大学生等にターゲットを絞り、連合の中で5人から10人集めていただきテーマを決めて、担い手の意識を地域に持ってもらうフェアを実施した。これはきっかけづくりだが、中学生も高校生もかなり来てもらい、それが地域に帰ってきて、例えば私の地元の連合でも秋にまちをきれいにしようというキャンペーンでまた集めてもらい、次世代の担い手に対して地域と密着する仕掛けをつくった。その中で、地域の行事の参加率も大分上がって、区としても大事にしている。具体的に「これだ」ということをしていかないと、単に参加を促しただけでは若者たちは地域に来てくれない。鶴見区は下町で、お祭りも盛んなところが多いが、子どもたちの参加率が上がってきている。それも踏まえて、市の計画は非常に包括的で、論理的で理論的だが、区だとか地域にそういった部分が根づけば、日進月歩で地域の中で活性化できるのではないかという一つの例が今、芽生えてきたという現在進行形の状態で、今後も続けていきたいと思っている。

(西尾委員長) 民生委員は児童委員でもあるわけで、地域の若い世代に向けて地域福祉を防災というテーマで呼びかけたら参加が多くなってきた、というご意見だったと思う。こういう関わりのある実践事例でも結構だし、他にもたくさんご発言を頂戴できればと思う。

(武隈委員) 馬場地域ケアプラザは鶴見区の寺尾第二地区というところを担当している。連合町内会長のご意向から地区社会福祉協議会が中心となって年に1回、地域の小・中学生と自治会町内会長を中心とした地域の方々と意見交換会を実施している。子どもからは、ボール遊びができる場所がないとか、あそこの道のコーナーは危ないからミラーをつけたほうがいいのか、小川が汚いからもっと清掃活動をしたほうがいいのか、たばこのポイ捨てが多いとか、活発な意見が出る。それに対して、会長方をはじめ警察や土木事務所、区役所にも協力してもらい、こどもから出

た意見に対する回答をする会もやっている。子どもの意見を地域づくりに反映させることを非常に意識されている。

そのような活動には学校の協力は絶対に必要である。おそらく学校側も地域との関わりを意識しているのではないかと思う。担当エリアにある中学校では、地区社協の事業に合わせて第3金曜日の部活動を少なくし、子どもたちが地域と関わる福祉の日を設定してくれている。その日は地域ケアプラザを会場に子どもたちが集まれるよう場所を地区社協が提供している。子どもたちが主体的にパンケーキを焼いたり、自分たちが希望する活動ができる事業となっている。地域づくりには子どもの参画が欠かせないし、継続する必要があると思っている。障害の面で言うと、その事業には近所の自閉症の子どもたちも参加する。特別待遇するわけでもなく、拒否するわけでもなく普通に子どもたちと一緒にいる。その場に自然に溶け込んでいく。

地域福祉保健計画の推進には地域の方々が地福計画の内容を正しく理解することが重要だと感じている。幸い、担当地区は連合会長や民児協（民生委員児童委員協議会）会長が地福計画を非常に理解されている。正確に理解することが障害の方にとっても住みよい地域をつくっていくことになると思うし、そこには子どもたちが欠かせないし、それには学校の協力が欠かせないというのが、私の現状の感想である。

（西尾委員長） 地域ケアプラザが地域のつなぎ役として大事な資源をつないで、そういう場所を企画されているというのを興味深く伺った。

（久保委員） 2027年度は保土ヶ谷区が100周年である。保土ヶ谷区としてキャラクターを市民に公募したところ、大体100程度イラストが集まった。その中から5つほどが選ばれて小・中学校に選考委員として5、6校に承知いただいて子ども目線で、これがいい、あれがいい、ここは少し合体したほうがいいよ、と意見をもらった。子ども目線でいくと、ここの特徴があるからこれとこれを合わせたらいいものができるのではないかという、私たちにない発想があり、子ども目線も大変重要ではないかと思った。

（森委員） 新聞記事でベ이스ターズの選手が磯子区に放課後等デイサービスを起業したとあった。札幌市では何百も放課後等デイがあるが横浜は少ない、だから立ち上げたということであったが、現場目線からいくとちょっと違うなというのが本音としてある。横浜にははまっ子やケアプラザ、私が所属している地域活動ホームや、障害のある子が放課後でも過ごせる場所がある。引き続き今以上に、はまっ子やケアプラザでも受け止めていただけるようなご協力も頂ければという願いがある。また普通級の生徒と支援級の生徒との関わりがなかなか持てないと多くの先生から聞いている。しかしながら、市の教育委員会において横浜型のインクルーシブ教育を打ち出している中では、世界的に見た、また、国内でも進めているインクルーシブとはかけ離れている。実際、分け隔てしているところについては、通級であったり、様々な取組がされているところもあるかと思うが、ぜひその点については学校の先生等の意見も聞いていただければと思っている。

また子どもの見守りという意見交換のテーマの部分だが、港南区では、港南中央

駅はかなり広い付近に自治会町内会、また、地域住民における、朝8時から8時半ぐらいの時間帯の見守りボランティアがかなり多くいる。しかし他区のある駅近辺ではほぼ見られない。地域性によるものと思うが、こういったところに仕事等を終えた方々が、ここには子ども・若者、子育て世代となっているけれども、見守りに参加できるような、また、それをやりがいとじてもらえるような高齢者等の巻き込みもひとつ考えていただければいいかと思う。これは地域事情にもよるかと思うが、高齢化率に視点を当てるだけでなく、共生という部分でどう生かせるかというところに視点を当てて進めていただければと思う。

また、市の事務局の方々については、今日のこの意見が、例えば教育委員会、子ども青少年局といったところにどう伝わっていくのか。実際、アクションを起こすのはあちら側ではないかということでは、縦割りにについてはもう少し横断的に、また、この場で本当だったら教育委員会の方々にも聞いていただきたいという思いがある。

(坂本委員) 歯科の立場から、先ほど障害児・者の話が出たので、考えていることを話させていただく。当歯科医院にも小学校2年生から自閉症の子供が診察に来ている。最初は座るのも無理だし、隣のユニットに患者さんを座らせてしまうと何をするか分からないという問題があり注意しながら、1か月に1度、お母様がきちんと連れていらっしやっていた。今はもう高校生になって普通のお子さんと全く変わらず、ユニットに座り、治療を受けて帰られる。歯科医師会でも障害児者をどの様に診療していくかということが課題になっている。患者さんの診療で事故やケガがあってはいけませんので、歯科医師会でも障害児者の歯科診療協力医ということで研修会をし、その修了証を持つ歯科医院だけ公的に行政などに診療可能な歯科医院として名前を出すということがありますが、実際、1～2日の研修を受けたところで全部が分かるわけではない。けれども、受講した会員の歯科医師として、自分たちにできる事があればやりたいと思っている。ただ、障害の程度の情報も少なく、診てほしいという患者さんご家族から連絡があっても、その方がどこまで診療が可能で、どのぐらいの時間を取っていいかという情報が全く入ってこない。ただ、お断りするのには申し訳ないのでいろいろ聞きながら、どうしても自分のところでの診療が難しいと判断した場合には、横浜市歯科医師会が運営している市の保健医療センターのほうに治療をお願いして、そこで終わってからまた自院に戻ってきてクリーニングなり予防処置ができるように、なるべく途切れないように伴走型のダブルかかりつけ歯科医体制ができるようにやっている。受け入れたくても受け入れられないところでストレスが多い。受け入れる側と受け入れを希望する側の情報のマッチングのようなものをもう少ししていただければ、自分たちも地域で、お母さんたちの抱えている歯科への通院ストレスをもう少し軽減したりできるのではないかという思いを抱えている。多分、地域の先生たちも抱えていらっしやると思うので、いい方向性や案があれば、ぜひ一緒に考えていただきたいと思う。

(西尾委員長) 地域で暮らしていくということは、歯科診療も大事だと思う。

(篠崎委員) 私は近隣の小学校で21年間登校時の見守りをやっている。障害から離れるが、港北区には、ケアプラザ、コミュニティハウス、図書館、それから、障害のあ

る方の施設やNPO、社会福祉法人などいろいろな施設がある。ケアプラザには地域担当という方がいる。この方が主に地域の相談事やイベントなどを手がけて交流を図るということをやっているが、大変すばらしいことだと思う。ただ、さっき申し上げた各施設の垣根が少し高いというか、それぞれその団体は自分のところの仕事があるのでなかなか交流できていないと思う。ケアプラザと同じように、各施設にも子ども支援担当であるとか、あるいは子育て担当であるとか、そういう担当の方を置いていただければ、もっと話は広がってくるのではないかと思う。新しく施設をつくるということではなくて、現在あるところに担当者を置いたらいかがだろうかという提案になる。

(西尾委員長) 地域のつなぎ役、コーディネーターのお役目をどう配置していくか、そこが大事なポイントだというご提言だったかと思う。

(久保田委員) 薬剤師会の久保田です。僕自身も家族に障害がある者がいるので、皆様の意見はよく分かりますが、どうしても地福計画になると、障害に偏ってしまっているなという気がしている。障害の話から言えば、確かに小さい頃からインクルーシブが当たり前になっていくのが大事だと思うので、教育の中で一緒にいるというのはすごく大切だと思う。一方、親の世代で考えると、オープンにしたい人と隠したい人が混ざっているということがある。レスパイトではないが、親がちょっと休めるような機会を設けるのはすごく大事だと思う。瀬谷の子育て支援拠点ではあえて別部屋をつくっていて、お母さんたちがそこで少しゆっくりできる場所をつくっている。親の世代と、これから大きくなって行ってそれを当たり前にしたい世代とは、ちょっと意味合いが変わってくるのではないかと思った。

また、地域の活動を地域の一人として見ると、地域の中で子どもや子育て中の親世代がつながりにくいというのが一つあるので、まずは子どもからつなげていきましょうというので幾つか意見が出ていた。お祭りの中で中学生や小学生がブースをつくるとか、そんなことをして、子どもが主体的に活動できる場所を地域が提供していくというのが一つ方法としてはあるのではないかと、そうやって子どもが積極的に関わることで、親と一緒に関わってくるようになり、地域とつながる機会をつくっていくという話が出ていたり、学習支援のボランティアでも高校生が活動しているというのがある。子ども側から言うと、未就園児とそれ以降で地域とのつながりが一回途切れてしまうというのが大きな問題になっている。未就園のうちに地域とつながったが、子どもが保育園・幼稚園に入っていくと、親が仕事をしなければいけなくなり、地域を向けなくなってくるという話がよくある。その中で、どうもそれ以上の地域の連合や民生委員さんの世代の皆様と話をされていて、こういうことをやったらいいんだよな、とこちら側目線で考えていることと、親御さんがこういうのがあったらいいなというニーズとが若干ずれている地域があるのではないかと、思っている。その辺のすり合わせができていくといい。実際、私も地元に戻るとそのずれを感じている。うまくアンケートが取れないのかななどを考えながら、幾つかの段階で幾つかの課題があることを感じている。

(岐部委員) 私は自治会の会長という立場で動いている。ここへも市連会から来ている。神奈川区では子育ての世代では「すくすくかめっ子」という未就学児のお子さん

親御さんの集いがある。そこでは悩みのあるお母さんたちが子どもと一緒に過ごせ、地域の皆様が結構関わっている。これは結構いい参考例かと思う。もう一つは、私の住んでいる地域で、小学校の総合学習の授業に「地域を知ろう」というものがある。私はここのところ盛んに授業に呼ばれている。授業中に私のところに子どもたちがいっぱい来て、「高齢者は地域を知らな過ぎるのではないか」とその中の6年生が言った。それを聞いたときに、おお、すごい、子どもってそう感じるんだなと。それで今、地域のガイドブックをつくるので、そのために私から皆さんにいろいろなことを聞いている。例えば「地域ってどんなところ?」「どんな人がいるの?」「何%ぐらいが高齢者?」などを聞く。子どもたちは、おじいちゃんおばあちゃんたちって意外と自分の住んでいる地域を知らな過ぎるから、それを知らせてあげたいという気持ちがあり、今、一生懸命やっている。その授業のときは、障害のある特別級の子も普通級の子も一緒になって動く。学校の方針、校長先生の考え方もかもしれないが、すごくいいところがある。あえて差をつける必要もないし、我々大人も、この子は障害児、この子は普通の子という見方をしなくてもいいというのが一つの反省点である。

(内田委員) 福祉教育に関しては、小学校、中学校、高校と必ず毎年行って、聞こえないことについての体験や話をしている。実際、子どもたちの声を聞くと、ぜひ1年間に何回か学びたいという声はあるが、残念ながら学校の考え方や福祉教育についてあまり重く見ていないような感じがする。また、先生のお話では、よく「予算の関係で」とか「自分のポケットマネーで」と言われるので、1年に1回だけで終わっている状況で、それでは子どもたちの希望が実現できず非常に残念だと思う。教育委員会の考え方も、もう少し積極的に福祉教育を織り込むような義務があると思う。その辺を少し変えてほしいと思う。そうでないと、普通の子どもたちと障害者、障害児の触れ合いがなかなか難しいのではないかと思う。また、子どもの希望がもっともっと盛り上がるように考えてほしいと思う。事務局の皆様も、ほとんどが健康福祉局の職員の方かと思う。そのほかの方の顔をあまり見たことがない。意見が届いていないのではないかと思う。ぜひ教育委員会の方とよく考え方を話し合っしてほしいと思う。車椅子の方、視覚障害者の方、障害者は皆同じである。これからももう少しいろいろ考えてほしいと思う。

(鶴見委員) 障害児を育てている親として、障害について皆様がいろいろ考えてくださっていることをすごくありがたいなと思って聞いていた。ただ、本当に私が望むのは、例えばこの意見交換テーマの「次世代を担う、子ども・若者、子育て世代が～」と読んだときに、読んだ人の頭の中に、普通の子もいれば、太った子もいれば、障害のある子もいれば、病気の子もいれば、外国人もいればというのが普通にある状況が夢としてある。そのためには、小さなときからいろいろな教育をすることももちろん必要だが、一緒にいるということ。隣の子は自分とは違う、こっちの子もちょっと何か違うみたい、でも、一緒にいて楽しいよねとなるような、そういう環境をつくっていくことが大事なのではないかと思う。

私は小さな耳鼻科のクリニックでスタッフとして働いているが、いろいろなお子さんが来る。障害のあるなしにかかわらず、入ってくる前から泣き叫んで座らせる

こともできない、何もできないようなお子さんから、何でもできる子もいる。その泣き叫んでいたお子さんが何度か通ってくるうちに、一人で座って一人で処置してもらって、ばいばいと言って帰るようになる。子どもによって、すんなりできる子と、何回も何回も何回もしないとできない子もいる。人は成長すると思う。というか、成長するために生きていると思う。障害のある子も、ほんの少しずつだったり、なかなかできなかつたりしても、必ず成長する。ただ、それには時間がかかたり、回数がかかたり、サポートが必要だったり、何か工夫が必要だったりする。そういうことを周りのみんなが自然に、ちょっと手を差し伸べるとか、声かけするとか、この人にはこんなふうに言う通じるんだとか、何か考える余裕とか、そのことで、その子もまた、その人もまた成長すると思う。育てている親としては、障害があってもその子なりに、ちょっとずつだけ前とちょっと変わってきたよね、みたいなことが見えるとすごくうれしい。別にほかの子と同じようになつてほしいとか、一番になつてほしいとか、それは障害のあるなしにかかわらず、お母さんっていつも心の中で葛藤していると思うが、みんながそれぞれに楽しく、それぞれの生き方で生きていける、そういうまちをつくろうというのがこの計画だと思うので、そのあたりを心の中に持っていたいなと思っている。

(西尾委員長) まさにこのプランの願い、目標を表現していただきありがたい。

(星委員) 私どもの活動ではお子様との関わりがなかなかないが、ぱあとなあ神奈川でも、20代、30代の若者の、ご自宅にお住まいになっている方の後見のご依頼が大分、増えてきているイメージがある。先ほどグループホームの話もあったので、そういうところに入れない方がご自宅にいらっしゃるイメージがあるが、そういう方の支援を後見としてもやっていかないといけないと思っている。

私の経験でお話しさせていただくと、若者の部類に入る方だと思うが、メンタルを患っている方で、最初、病院の入退院を繰り返している際に私が担当し、アパートに住むようになった方がいた。最初は病院関係の活動を行ったり来たりされていたのだが、徐々に精神の生活支援センターに行けるようになり、やがていろいろなサービスを使いつつ、今はご本人や周りの支援者と相談して近所の就労支援施設に行けるようになって、だんだんと社会性が広がってきている方がいらっしゃる。後見の対応をする方で、いろいろ事情があり、地域との関わりはなかなかすぐにはできないのだが、徐々にご本人の状況に合わせて地域の中に溶け込んでいく方もいらっしゃるということを知っていただいて、そういうことをご近所の方が温かく見守っていただけると、私どもの活動もしやすいかなと考えている。そういう方が地域の中にいらっしゃるということは知っておいていただきたいと思う。

(西尾委員長) そういう関係の中で、地域で成長していける機会をどうつくっていくかという課題かと思う。

(小宮山委員) 実はいろいろな問題が地福の中には隠れている。厚労省が果たしてどういう目的でつくったのか、そういうことを考えてみなければいけないと思う。戦争の時代、戦後は遠くなったという言葉から始まって、今、年代別にZ世代、Y世代、ついにα時代という言葉がはやっている。戦後、私たちは学校の教育を受ける、そして隣近所の人たちと生活する、これは皆様も覚えている方がいらっしゃると思う

が、向こう三軒両隣として何かあったらお互いに協力し合おうよというもので、「おばちゃん、今日うちの子預かってね」と言えば「いいよ」と。ご飯も食べさせておくよ、お風呂も入れておくよという時代があった。ところが、日本は高度成長において、経済に走ったために、人の心が豊かでなくなってきた。そして、世界に目を向けたときにいろいろな問題があって、それが日本に返ってくると、我々日本としてやることではないと思いつつも、そういうものに走ってしまった。だからいろいろな問題がここで起きてきている。今の若い世代感というものをどういうふうに直させていかなければいけないのか。これからの社会をつくっていく担い手を、我々はこの計画をもってやるのではなくて、そのもの自体を根本から考えていかなければいけないのではないかと考えている。私は民生委員を33年やってきている。その33年間の間にいろいろな法律が変わった。でも、法律は変わっていても、世の中は変わっていかない。だから、障害者の問題にしても、確かに地域にいろいろな形でおられる。おられるが、これは地域の皆様が温かい目を向ければ、必ず穏やかな生活ができる世の中が生まれると思う。計画もその中の一つだと思う。だから、私ももうわずかな、残り少ない期間だが、一生懸命考えて市計画、これからの第5期の問題も進めていかなければいけない。区計画もその地域に合った計画をつくって初めてよいものができるのではないかと考えている。

今、学校の問題も大分出ているが、学校も非常に苦しんでいると思う。成績を上げればいいんだと言って文科省は始めたけれども、そうではない。働いている先生方が疲弊してきている。そして、この福祉保健計画というものを、よりよい市民のために我々は計画しているのだということを頭に入れて、しっかり練り直していく必要もあるのではないかと考えている。

(西尾委員長) 多数ご意見を頂戴し、非常に貴重なというか、投げかけに対して地域の実践も踏まえてご意見を頂戴したかと思う。先ほどの事務局へのご質問に、もしコメントがあればと思う。

(事務局) 先ほど、健康福祉局だけでなく、教育委員会や市内の関係局との連携へのご意見を頂戴した。計画冊子の80ページの推進体系ということで、1つ目は今回の策定・推進委員会、2つ目が年度末にある検討会、3つ目に関係局区検討プロジェクトというのがある。その中で、教育委員会、こども青少年局、市民局、区等、関係局区が連携して会議をしており、本日のこの委員会のことについて報告させていただく。これまでと同じように、今年度もそのような形でさせていただく。

(西尾委員長) 皆様のご意見を頂戴したので、豊田委員から感想、また、まとめのコメントをお願いしたい。

(豊田委員) 新参者の私がこの委員会に出るのは初めてで、今年から計画の委員にさせていただいている。私は今、千葉の学校に行っており、松戸市や隣の柏市で計画の委員会に出させていただいているが、事例とか、皆様が扱っていらっしゃるいろいろな活動の実践がぱぱっと出てきて、それがいろいろなところでつながっているのが見えてくるのは、さすが横浜だなと思った。昨日、市のケアプラザの地域交流コーディネーター、生活支援コーディネーターの研修があり、私自身、市内でNPOをやっているものだから、そこで講師をさせていただいた。これから地域交流で入

っていく方たちが多い。以前、地域交流のコーディネーターは離職率が高かったが、昨今は非常に皆様定着されて、地域のことをいろいろ分かっていらっしゃる。様々な場に立って発表したりまとめたりということをしごくされていた。実は、ケアプラザは皆様のお住まいの近くにあって、この計画を推進していくときの核になっている。今日の話聞いて、皆様地域でいろいろな活動をされて、取組の中で問題を抱えていたり、課題を抱えている方の代弁をされて、こういう状況があるんだということ言われたが、一方で、こういう活動とか計画を推進していく側がある。これを受け止めて、皆様と一緒にやっていくという立場の人たちがいらっしゃる。横浜は、ケアプラザを中心にして地区での活動が展開されていく。そこに区行政と区社協が入ってやっているのだが、こういう体制は全国にない。私も地域福祉を学校で教えていて、包括ケアシステムや重層的支援体制などいろいろな仕組みがあるが、横浜のこの仕組みはほかにはない。横浜市に30数年関わっているなかで今の状況を見ていくと、結構、横浜型というのがある。これは、地域包括ケアもそうだし、地域支援も実はそうで、1991年に地域ケアシステム基本指針というのが横浜で出ている。この中で、フォーマルの方ももちろんいらっしゃるが、地域の中で活動している方たちをいかに支援していくかということ、市のほうからも、いろいろな学識の方を入れて方向性を出して、それに向かってずっとやっている。その体制を、結構お金を出してやっている。ケアプラザの地域交流は市単の事業である。人件費を厚くつけてやっている。それをやった結果が、例えば今皆様がやられているような活動の中での実践としてできてきているわけである。これはすごい財産だし、これをどうやって皆様と一緒に継承していくか。その財産をこれから受け継ぐというところで、子どもさんや若者がいる。

この計画の中にもあるが、今の横浜市の中期計画がある。要するに横浜市のこれからの行く末を基本的なものとして定めている計画がある。その一端に地域福祉もあるが、その計画の中にも「子育てしたいまち 次世代を共に育むまち ヨコハマ」というのが出ていて、子どもを中心に横浜というのはこれからも発展していく。子どもさんが帰ってきてこのまちで住み続けたいとか、戻ってきたいと思うまちなのだろう。横浜はカッコいい、戻ってきたいとか、横浜という若者は、いいとか、ちょっと行ってみたいなどみんな思うのではないだろうか。そういうことを思えるような子どもたちや若者がこのまちにたくさんいると思う。その人たちが、このまちで先ほど皆様が言われたようなことを実感して、一緒にやっぺいこうとか、共にやろうという気持ちになれるようなまちをつくるというのが、この計画で望んでいるところなのかな。そのために皆様もいらっしゃるし、いろいろな仕組みがあると思う。そういう点でいくと、皆様からお話を聞いていると、やはり横浜ってすごいなと思いつつ、一つ、市の支援体制や推進体制のアセスメントを一回実施してみてもいいかな。私が思うのは、地区支援の推進チームである。どういう風にやられているか、あの体制でいいのかどうかということも私は見ている、実際に委員の皆様が地域でいろいろな課題をお持ちになられていることに対して、どう関わるかというところが、推進チームの方たちはよりよく分かっていると思う。こういう体制の中でこれからやっぺいこうか。支援チームを一番最初につくった

のは、介護保険が始まってすぐだから、もう20年ぐらいたっているわけで、その体制でいいかどうかを見ていくことが私は必要だと思う。

また小宮山委員がおっしゃったが、地区ごとにいろいろな取組があるので、それぞれの取組を踏まえてやっていくことが必要だと思う。各区において委員会はどんなメンバーが入り、どういう方向でやろうとしているか、区ごとにいろいろな取組があるのかなと思う。私は神奈川区で委員をやっているが、結構いろいろな委員がいて、今年から学校の先生を入れたり、国際交流の方を入れたり、URの方を入れたりしている。区によって課題とか捉え方が違うと思うので、そういうものを見ながら、それぞれの区の特性に合ったものがこのように出ているのだということを、ここで共有してもいいのかなと。市はそういうことをしながら、この市の計画が各区にどのように伝わっているかということを見ていかなければいけないのかなと思う。この場で皆様からいろいろと教えていただいたのが、区と地区とこの市計画が連動しながら、3層にわたって展開されていることを皆様が実感できるような、そういう場にしていけるといいかなと思う。

(西尾委員長) 横浜の特徴と歴史の分厚さというか、それが地域の中でつながっているということは、本当に特徴かもしれない。今日は、子ども、子育て、次世代ということで、この計画に関連するテーマについてご意見を頂戴した。自身の感想は、子どもは教育を与える対象ではなく、まさに役割を持って地域の中で育っていく主体であって、参加して関わりを持っていく主体なのではないかと。ただ、育ち方には様々な経験が必要だし、それをきめ細かく見て支援していく存在も必要だろうなという感じがしており、それがコーディネーターになるのかもしれないし、そういうところをどのように考えていくのか。それから、計画の中では事務局の地区支援チームの役割かもしれないが、そういうところもこれからの検討課題になるのかなという感じがした。特に障害福祉で言うと、放課後デイのお話があったが、制度的なサービスが充実すればするだけ、逆に本人や親御さんの地域との関わりが弱まってしまうということもあって、でも、せつかくそういうときにつくられた時間で、地域の中でどううまく自分の意思で生きていくことができるのかということを考えるきっかけにもなるのではないかと。そのために、地域福祉保健計画、区計画も非常に重要な役割を果たしてくれるのではないかと思い、ぜひ皆様の意見を反映させつつ、この推進に当たっていきいたいなという感じを持った。

意見交換は以上にさせていただいてよろしいか。

その他のところで、この場で委員の皆様から何か発言されたいことがありましたら、お願いできたらと思うが、よろしいか。

それでは、本日の議事録については、発言者のご氏名、内容の要旨を記載したものを事務局で作成していただいて、横浜市のホームページで公表させていただく。委員の皆様には事務局から事前に確認されると思うが、よろしく願いたい。

それでは、皆様のご協力の下、計画の推進について貴重なご意見を頂戴し、ありがとうございました。

閉会

資 料	<p>○令和6年度 横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会 次第</p> <p>○横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会委員名簿 (資料1)</p> <p>○横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会運営要綱 (資料2)</p> <p>○第5期横浜市地域福祉保健計画について (資料3)</p> <p>○第5期横浜市地域福祉保健計画推進スケジュールについて (資料4)</p> <p>○第5期横浜市地域福祉保健計画 評価について(現状値・評価シート) (資料5)</p> <p>○第5期横浜市地域福祉保健計画の推進について意見交換 (資料6)</p>